スズロとソゾロ（その五）

我妻　多賀子

過去四回にわたり形容動詞スズロおよびソゾロの意味・用法について、この小誌で調査結果のあらましを述べて来た。ところで、前号のソゾロの考察の際にスズロとソゾロの相違点に関し少し触れはしたが、そこで記したように、中間的な存在であるスゾロという語についてはまだ言及していない。また、関連する形容詞や形容動詞・動詞、そしてウタ（歌）、ココロ（心）、コト（事）などが下に付いて熟語化したものなどについても述べるまでには至っていない。さらには、取り挙げた一つずつの用例が果たして信頼のおけるものかどうか、異文も見る必要がある。

そこで今号では、これまでの「一、はじめに」「二、スズロ」「三、ソゾロ」に続いて新しい章を設け、右に記した事柄を順次述べたあと、最後に全体をまとめ、スズロとソゾロの違いがどこにあるのかを探ってみることにしたい。

以下、今までの内容を承けて「四、スゾロ」から始めることにする。

四　スゾロ

スゾロはすでに『源氏物語』に五例あるという。（注1）しかし、この説はきわめて疑わしい。なぜならばこれら五例は、いずれも『源氏物語』最後の蜻蛉と手習の巻に集中して見え、しかもそれぞれ異文がある。例えば

。わがかくすぞろに心弱きにつけても・・・　　〈源氏物語・蜻蛉〉

という文では、スゾロニの部分が、横山本・池田本・肖柏本・三條西家本ではスゾロニとなっている。また

。すぞろなる穢らひに籠りて・・・　　〈源氏物語・手習〉

の例では、スゾロナルの個所が、榊原本ではソゾロナル、伝二条為氏本・肖柏本・三條西家本ではスゾロナルである。その他のスゾロ三例も、同様に右の諸本ではスズロとなっている。なお、スズロやソゾロと書かれた横山本・榊原本などはいずれも青表紙本系統に属する。いずれにしろ、右のように多くの異文が存在するので、『源氏物語』におけるスゾロは確例としてとるわけにはいかない。その他、『伊勢物語』でも

。みちの国にすぞろに行きいたりにけり。　　〈伊勢物語・一四〉

など、スゾロの例が三つあるが、これらはすべ最福寺本に見える。ところでこの最福寺本は、古本系統に属し、室町時代に成ったものという。（注2）よって、時代も少し下がる上に、他の『伊勢物語』の諸本では右の部分がすべてスズロと書かれているので、これまたスゾロの確実な例にはならない。今改めて、管見に入る限りの中古に成立した作品の索引をひもといてみても、スゾロの例は全く出て来ない。ただ、スゾロハシという語が『栄花物語』にあるので、

おそらく中古末には、スゾロという語は用いられるようになっていたのではないかと思われる。そして、中世になるといくらか例が出て来るようになるが、どういうわけかそれが『平家物語』に集中している。元々スゾロは、それ程用例数が多くない語であるのに、同書には左のように四例使われている。

。山門の大衆、六波羅へはよせずして、すぞろなる清水寺におしよせて、仏閣僧坊一宇ものこさず焼きはらふ。
〈平家物語・一〉

。されば、人の世にあればとて、すぞろにすまじき事をもし、いふまじき事をもいふはよくよく思慮あるべき物也。
〈平家物語・四〉

。げにもすぞろならむものは、かやうの老法師を見て、なにとてか懐かしげには思ふべき。
〈平家物語・八〉

。聖も是を見奉てすぞろに墨染の袖をぞしぼりける。
〈平家物語・一二〉

右のうち巻一の例では、山門の大衆が清水寺に押し寄せたことを述べている。それは単に、清水寺が興福寺の末寺であるというだけの理由で実行されたので、スゾロナルは「これといって攻めるわけのない」の意を表す。つまり、ここのスゾロは、かかわりのない様子をいうもので、すでにスズロ・ソゾロの考察の際に見て来た、G「無関心な」とか「無関係な」の意味に相当する。同じように、巻八の例も「本当に血縁のないものは、このような年とった法師を見てどうして親しそうに思うことがありましょうか（イヤ、ないでしょう）」と訳せるので、未然形で使われたスゾロナラは、やはり関係のないことを示すGの意味になる。この例で、スゾロが未然形で使われているのは、下の助動詞ムに続いているためで、そのムは仮定婉曲の意を表し、下に来る名詞「もの（者）」を修飾する連体形になる。つまり、ここのスズロナラムは、一語で捉えれば連体形に准じて考えることが出来る。ところで、『平家物語』では、スズロ・ソゾロ・スゾロが連体形になると、すべて「何の関係もない」の意で用いられるという説がある。（注3）よって、右に挙

げた二例はそれぞれ連体形用法なので、Gの「無関係な」の意味にとって何ら差し支えはないということになる。次に巻四は、源三位入道頼政が謀反を起こしたのは宗盛の行動に原因があるというところで、「だから、いくら時めいているとて、ただ何ということなしにしてはいけないことをし、言ってはいけないことを言うのは十分に控えるべきことである」と解釈出来る。したがって、スゾロニはこれといった根拠もなく自然に進んで行く状態を言い、スズロ・ソゾロの時に見たDの「何となく」「わけもなく」の意に当てはまる。残った巻一二の例は、文覚が涙ぐんでいる若君の六代をご覧になって「墨染の袖をしぼった」、つまり「泣いた」ということを述べている。ただ、その泣き方は普通に「泣く」のではなく、「袖をしぼる」くらいに激しいので、そこにかかるスゾロニはDの「何となく」よりも、もっと程度の甚しいFの「むやみに」の意にとる方がふさわしいと思う。以上、『平家物語』の四例は前号までに述べて来たD・F・Gのいずれかの意味に該当するものばかりである。

続いて、他の中世作品におけるスゾロの例を公刊の索引類などを元になるべく多く捜し出してみたところ、その例は全部で一0例にもならなかったので、まず左に作品の成立年代順に用例をすべて掲げてみることにする。

。あやしげなる法師の「人やつかひ給ふ」とてすぞろに入来る有けり。　〈発心集・一〉

。はるばる見送り侍りて、すぞろに泪を流し給へりけり。　〈撰集抄・一ノ一〉

。これ魂異代にかへるらんと侍事おもひいでられて、とにかくに心すぞろに侍。　〈閑居友〉

。風にしたがひてなるこの音のするもすぞろに物がなし。　〈建礼門院右京大夫集〉

。此宮ぞ誠に朕が御孫也ける、すぞろならん者ならば、などてか懸る老法師をば懐しく思ふべき。　〈源平盛衰記・三一〉

。然リト雖ドモ又スゾロニ身ヲ苦シメ、作スベカラザルコトヲ作セト、仏教ニハスゝムルコト無キ也。
〈正法眼蔵隨聞記・三ノ二〇〉

。情なく海へ入奉らんことを悲しく思ひて、すぞろになみだせきあへず・・・
〈御伽草子・岩屋〉

。正清都にて度々の合戦に、すぞろに命のおしかりつるも唯汝等が有ゆへなり。
〈毛利家本幸若・鎌田〉

。イニシヘノ人ノ涙ノ行衛カトスゾロニ露ノ落ル篠原
〈鴉鷺記・下・八〉

初めに右の諸例をジャンル別に見ると、説話文学の例が多い。これは中世という時代に説話文学が全盛だったことから考えると、当然の結果である。ただその他、作り物語や軍記物語・日記・仏教書などにも例があるので、スゾロのジャンルによる使い分けはなかったと言ってよさそうだ。次に意味・用法の面から順に見て行くと、まず『発心集』の例はスゾロが「入来る」という動きの顕著な動詞にかかっているので、スズロ・ソゾロの時に見て来たAの「あてもなくふらふらと」の意にとれる。そもそも『発心集』はソゾロがなく、スズロのみが七例出て来たが、そのうち二例が左のようにAの意味を表していた。

。十日余が程、すゞろに嶮しき谷・峯を迷ひありきけり。
〈発心集・三〉

。すべき方なくて、心のあられぬまゝにすゞろに馬にうちのりて打ち出でにけり。
〈発心集・四〉

右の事実からすると、『発心集』の作者は、Aの目的や理由がなく、心の赴くままに行動する様子を言うスズロ・スゾ

ロをよく用いていたようだ。

二つ目の『撰集抄』の例は「泪を流す」時にスゾロを使っている。同書にはスズロが一五例、ソゾロは四二例あったが、そのうち「涙（泪）」を対象としたものはそれぞれ七例、一八例と五０％近くになった。つまり、『撰集抄』には、「涙」を対象としてスズロ・ソゾロを使った例がいかに多かったかがわかる。そして、先の考察の際にも触れたが、「涙」の場合、スズロ・ソゾロが「流る」「落つ」などを伴えば、その動詞は自然発生的で穏やかなので、Ｄの「なんとなく」の意を表す。一方、「あふる」「こぼる」などの動詞だと、量的な多さや質的な強さが感じられるため、スズロ・ソゾロはＦの「むやみに」の意にとった。「涙」については右のような区別をしてみたが、ここの『撰集抄』のスゾロは、動詞「流す」を伴っている。そして、言うまでもなく「流す」は「流る」とちがい他動詞なので、自然発生的ではなく意志的である。よって、この場合のスゾロはＦの「むやみに」とか「やたらに」の意にとるのがふさわしいと思う。同様に「御伽草子」の『岩屋』の例も「涙」を対象としているが、かかって行く語が「せきあへず」（［押エテコラエラレナイ］の意）なので、これまたスゾロニはＦの「むやみに」の意にとりたい。もう一つ『正法眼蔵隨聞記』の例も下の「身ヲ苦シメ」という他動詞にかかっているので、これも「むやみに」の意があてはまる。つまり、右に挙げたスゾロ九例のうち三例までは、Ｆの意にとれるものである。

三番目の『閑居友』の例は、スズロにはなくソゾロだけに見られたＪの「そわそわとして落ち着きがない」の意であろう。この意は人の気持ちについて言い、ソゾロの場合も左記のように「心」や「心地」と併用されることが多かった。

。とかう思ひつゞくるも、心のうちもそゞろなる心地すれば、いそぎたちて、やがて廣澤に参り給へれば・・・

<夜の寝覚・二>

。明け暮れ思ひわづらひて、心もそゞろになりはてゝ、明くれば五条、暮るれば橋へ出で・・・

<御伽草子・猿源氏草紙>

右の例から考えると、『閑居友』のスゾロも「心」と併用されているので、やはり「落ち着きがない」の意を表して

いると言える。

四つ目の『建礼門院右京大夫集』の例は、「風に吹かれて鳴子の音のするのが、これという理由もなく悲しく感じられる」と述べているので、スゾロニはDの「わけもなく」の意が最もよくあてはまる。その他、最後に掲げた『鎌田』と『鴨長記』の二例も「特別なわけもなく命が惜しかった」「何となく露が落ちる」と部分的に訳せるので、スゾロは、気がついてみたらそういう事態になっていたという様子を述べていて、Dの「わけもなく」の意にとれる。

五番目に挙げた『源平盛衰記』の例は、先に『平家物語』のスゾロの考察で見た巻八の例とほぼ同じ文である。よって、ここのスゾロはGの「無関係な」の意になり、特に問題はない。

以上、数々の文献から見つけ出したスゾロ九例は、A一、D三、F三、G一、J一と分けられる。D・Fが総じて多く、B・C・E・H・Iは用例が出て来なかったが、この傾向はスズロやソゾロの使い方とよく似ている。思うにスゾロは、スズロが徐々にソゾロに移行して行く時に、ある限られた作品の中でのみ、スズロ・ソゾロと同じ意味・用法でほんの少しだけ用いられた語だったようだ。古辞書類にも立項されていず、近世の作品には使用例がないので、中古末から中世末にかけて、期間限定で、ある一部の人にのみ用いられた中間的存在の語であったのだろう。

五　関連語

スズロ・ソゾロそしてスゾロから派生したと思われる語については、初めに一覧表にして掲げ、最後にとりまとめて考察を加えることにしたい。表はまず一番上に略した語彙を掲出した。――の部分にスズロ・ソゾロ・スゾロのいずれかが入るということを意味する。次に品詞の別を略号で示し、続いて、語の意味を簡単に記した。最後にその語が主として使われていた作品や古辞書の名前を挙げた。作品名のよく知られているものなどは省略して書き、古辞書には波線を付けた。要するに、空欄になっているところは用例がなかったことになる。なお、語彙は五十音順に掲げた。

〈スズロ・ソゾロ・スゾロの関連語〉

語彙	品詞	意味	スズロ	ソゾロ	スゾロ
―アリキ（歩）	名	あてもなく歩き回ること	清正集・書言	書言	
―ウタ（歌）	名	とりとめもない歌		撰集抄・太平記・日葡	
―カス	動	そわそわさせる	山家集		
―ガマシ	形	何となく落ち着かないさまだ	夫木和歌抄	山家集（注4）	
―ク	動	そわそわする・落ち着かない	源氏・著聞集・名義抄	源氏・無名草子・平家・住吉・盛衰記・著聞集・とはずがたり・風姿花伝	曽我物語

―ケシ	形	何となく落ち着かない		新訳華厳経音義私記
―ゴコロ（心）	名	そわそわした心	更級	宇津保・浜松
―ゴト（言）	名	とりとめもない話	源氏・無名抄	紫・中務・徒然・文明・天正・書言
―ゴト（事）	名	とりとめもない事 くだらない事	源氏・紫・とりかへばや	紫・寝覚・宝物・無名草子 発心・著聞集 沙石・中務・徒然・日葡
―ダチ（立）	名	目的もなく立っていること		日葡
―ハシ	形	何となく心が落ち着かない 気が進まない	蜻蛉・源氏・浜松・狭衣・栄花 大鏡・今昔・発心	源氏・とりかへばや・とはずがたり

発心	
	栄花・建礼門院右京大夫集

― ハシゲ	形動	何となく落ち着かないさま	栄花		
― ヒク（引）	動	弓に矢をつがえて、弦を少し引く		保元・義経・天草本平家・日葡	
― フ	動	そわそわする・落ち着かない	源氏・今昔		
― モノガタリ（物語）	名	とりとめもない話・雑談	宇津保・著聞集		

以上、スズロやソゾロから派生した一五語を並べてみたが、もとよりこれですべてを網羅してはいないと思う。ただ、時代的に古い主要な語はおおかた洩れなく書き記したつもりなので、以下、この表を見て気のついた点を箇条書きにして述べて行く。

① 品詞別に見ると、名詞が半分近くを占め一番多い。以下、動詞、形容詞、形容動詞と続き、きわめて変化に富んでいることが特徴的である。

② 名詞はほとんどがスズロやソゾロの下に使用頻度数の高い語が付いて一語化したものである。さらに、近世以後には、いずれもソゾロの下に付くが、ソゾロアメ（雨）、ソゾロカゼ（風）、ソゾロカミ（神）、ソゾロブルヒ（震）、ソゾロミチ（道）なども出て来る。そこで、表示したものも含めて見ると、総じて五音節の語が多い。これは結局、五音節ということで、和歌や語り物に使い易いように造られたためではないかと思われる。

③ 複合語の元になるスズロやソゾロの意味を見ると、「何となく」「わけもなく」が多い。これは前号までの考察で分類した中のDに当たる。スズロ・ソゾロとも意味別用例数ではDが断然多かったので、複合語となった場合も、この意味を元に成った語が多いのは納得が行く。その他、動詞や形容詞の複合語では「そわそわとして落ち着かない」の意を元に成ったものが多い。これは今までの調査ではソゾロにのみあったJに当たる。ところが、複合語になると、スズロカス、スズロガマシ、スズロハシ、スズロフなど、スズロでもこの意味が元になっているものが出て来る。スズロではたまたま「そわそわとして落ち着きがない」の意を表す例が文献中に出て来なかったが、複合語にこれだけの例があることからすると、スズロも多分「そわそわとして落ち着かない」の意味で使われていたのではないかと思われる。

④ 異なり語数で言うと、スズロとソゾロを元に成ったものは共に一一で同数あり、スゾロはわずかに三語を数えるに過ぎない。これは前章で述べたように、スゾロが元々それ程使われていなかったので、複合語になっても例が少なくて当然と言える。スズロ・ソゾロに関しては、一一のうち共通しているものが ―― アリキ、 ―― ク、 ―― ゴト（事）、 ―― ハシなど七語になる。しかも、同一の作品や古辞書で、スズロともソゾロとも言っていた例があるので、両語がかなり揺れていたことがわかる。

⑤ スズロの付いた複合語は圧倒的に中古作品での使用例が多い。前号までに述べた通り、スズロは平安女流文学で最も多く用いられていたので、この結果も納得が行く。

⑥ ソゾロを元に成った語は意外にも中古・中世と時代的に長期間にわたって使われている。ただし、総体的に中世作品での例が多く、特に ―― ウタ、 ―― ダチ、 ―― ヒクなどスズロに見られない語は、中世作品のみの使用例である。したがって、これは時代的にソゾロがスズロの後に使われるようになったという証拠になる。

⑦ 計一五の複合語が古辞書類でどのように出ているかを見ると、総じて例が少ない。また時代的に見ると、中世以前の古辞書の例はほとんどない。大元のスズロおよびソゾロは、すでに平安時代末期に成った『色葉字類抄』に立項されているので、複合語の方は、著者が作品中に好んで用いない限り、日常語としてはまだ一般に普及していなかったものと思われる。

以上、スズロ・ソゾロそしてスゾロが元に成った複合語の表を見て、注目すべき点をいくつか挙げてみた。結局、右に記したことは、これまでに述べて来たスズロとソゾロの関係、そしてスゾロの存在を傍証するような形になったといえるのではないだろうか。

六　おわりに

形容動詞のスズロとソゾロに関して、その意味・用法を探るべく初めに筆を起こしたのは平成一三（二〇〇一）年である。したがって、この二語と取り組んで早くも数年経ったことになる。その間さまざまな面から考察を加えて来て、だいぶ時期的に長くなってしまった。そこで、この辺で最終的に今までのことを振り返り全体をまとめることにしたい。その前に簡単に異文のことについてふれておく。

今回、底本とした作品でスズロとなっていた用例が他の本文ではソゾロであったもの、あるいはその反対にソゾロがスズロとなっていたものがどの程度あるか、公刊の校本類で一通り調べてみた。その結果、思っていたよりも異文は少なかった。まず底本のスズロが他の本でソゾロとなっていたものには、この稿の一番最初に記したように、『伊勢物語』の左の例がある。

。むかし、をとこ、みちの国にすゞろに行きいたりにけり。　〈一四〉

右の「すゞろに」が阿波国文庫本では「そゞろに」となっている。『伊勢物語』には計五例のスズロが使われているが、もう一カ所左に記す例も伝肖柏筆本ではソゾロである。

。これをたゞに奉らばすゞろなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。　〈七八〉

なお、右に記した『伊勢物語』の阿波国文庫本と伝肖柏筆本は、いずれも書写年代が中世以後で新しい。（注5）その他、中古の作品では、『源氏物語』に五〇例中九例、『夜半の寝覚』に一三例中一例、スズロがソゾロとなっていた異文があった。ただ、ソゾロと書かれていた本はいずれも鎌倉末期以降に成った新しいもので、また、その例は一本に限られ、複数にわたってはいなかった。このことから、ソゾロと書いたのは、多分に書写した人の恣意的な考えが影響しているように思われる。やはり中古では、ソゾロよりもスズロの方が主流であったと見るべきであろう。反対に中古の作品で底本のソゾロが他の本でスズロとなっていたものは、今回調べた限りでは出て来なかった。これは、中古ではソゾロの例が少ない上に、ソゾロ寒シという一種の慣用句で用いられたものが多いので、当然生じた結果かもしれない。次に中世に入ると、総じて例の減少したスズロに異文のないのは大いにあり得ることとして、ソゾロについても同様の現象が見られた。ただ、数ある作品の中で注目したいのは、『撰集抄』である。

この作品はすでに見た通り、スズロ一五例、ソゾロ四二例と他に比べて用例数が抜きん出て多い。これは作者が殊更この語を好んだからであろう。（注6）その上これらの例には異文が非常に多く、数でいうとスズロは一五例すべて、ソゾロは四二例中三六例までになる。しかも、その異文も一本だけではなく複数にわたっている。例えば底本の

。年来したがへる奴婢すらはなれ行に、つゞきもなき人の、すゞろに歎て・・・　〈七ノ一四〉

という例が、書陵部本、鈴鹿本、静嘉堂本ではソゾロとなっている。また底本では

。事のよろこばしさにそゞろに泪をながし侍りき。　〈九ノ一〇〉

となっているソゾロの例が、嵯峨本と静嘉堂本ではスズロである。このように、スズロとソゾロの異同が激しい上に、同じ本でも、ほぼ同一の例に、片方はスズロ、もう一方はソゾロを用いているものもある。例えば底本に見える

。此歌の所に至て、すゞろに涙のしどろなるに侍り。　　〈四ノ二〉

。すまひおもひやられて、そゞろに泪のしどろなるに侍る。　　〈三ノ一〉

の二文は、よく似ていながら、スズロともソゾロとも使っている。右のような『撰集抄』に見られるいくつかの考察結果は、作品自体の特異性もあるが、おそらくこの本が成立した中世の初めは、丁度スズロがソゾロに移行する時期で、両語がかなり揺れていたことを物語っているのではないだろうか。結局、異文に関しても種々検討してみたが、これまでに述べて来た説をくつがえすような新事実は出て来なかったことになる。よって、今まで取り挙げて来た用例の一つ一つは、一応信頼の置けるものとしてとっていいようである。

さて、過去何回かの考察で、ともかく煩雑でわかりにくくなっているのが、スズロとソゾロの意味である。心苦しくも繰り返すことになってしまうが、まずその意味は左記のように、計十個に分けて考えられた。（注7）

A・・・・（目的や理由がなく、心の赴くままに行動する様子を言い）　あてもなくふらふらと、漫然と

B・・・・（予期に反していやな事態が生じたときの不満な様子を言い）　不本意である、とんでもなくひどい

C・・・・（しっくりしないで、面白味に欠ける様子について言い）　風情がない、つまらない

D・・・・（理由なく、自然に進んで行く状態、気持ちを言い）　何となく、わけもなく

E・・・・（出任せで、筋が通らない様子を言い）　いい加減な、でたらめな、他愛もない

F・・・・（あるべき程度を越えているさまを言い）　むやみに、やたらに

G・・・・（心を引かれることもなく、かかわりのないさまを言い）　無関心な、無関係な

H・・・・（予期しなかったことが出現して驚いたさまを言い）　思いがけず、意外に

I・・・・（思慮のない様子、考えの浅いさまを言い）　軽率である、はしたない、恥ずかしい

J・・・・（人の浮き足立っている様子について言い）　そわそわとして落ち着きがない

以下、右のスズロ・ソゾロが表していた十個の意味を簡単にまとめてみたいが、その前に中古・中世の主要作品における用例数を一覧表にして示すことにする。表では、各作品の下の右側にスズロ、左側にソゾロの用例数を表した。なお、作品は数の多いものを任意に選び出したために、どうしても中古に偏ってしまったが、とりあえずこの表を元に意味をまとめることにしたい。

作品名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計
宇津保物語		三	一 二	二	一	一		一	一 九	一	三 一九

源氏物語	浜松中納言物語	夜の寝覚	栄花物語	今昔物語集	とりかへばや物語	宇治拾遺物語
三	三	一		一		
一				一		
二		一				
一八 八	五 一	五 一	三 四	二 一	五 六	二
一四	五					
八	一四 二	四			二 一	一 一
三			一			一
一		一	一	一	一	一 一
		一		一	一 一	
	一	二				
五 0 八	二 七 四	一 三 三	五 四	四 三	九 八	四 三

	撰集抄	太平記	計
七			一
五		二	二
五	一		二
四九	七 一八	一八	五七
二〇		三	三
三九	八 二三	一 五	三一
四		一	二
六	一		三
一二			二
			四
一四	一五 四二	一 二九	一七

右の表でまず気づくのは、中古初期の作品群でスズロがソゾロの六倍以上も用いられていることである。それが、中古末から中世初めになると、互いの用例数が拮抗し、中世も半ばを過ぎると、逆にソゾロの方がスズロを圧倒してしまう。これは今まで再三述べて来たこととは言え、改めて表を見ると、よりはっきりする。

続いて意味を見ると、Dの「何となく」が全体の半分近くを占め圧倒的に多い。恐らくスズロやソゾロは元々、これと言った明確な原因・根拠・目的がなくある方向に進んで行くさま、つまりDの意味を表していたものであろう。この場合、かかって行く語は言フ、念ズ、悲シ、哀レナリなど静的な感情表現の語が多かった。それが、行ク、旅スなど動的な語にかかって行けば、A「あてもなくふらふらと」の意になる。そしてこれらAやDが程度を越えて強く意図的であれば、E「いい加減な」、F「やたらに」の意に発展する。次に、自然の勢いに任せて進むことは予期しないことなので、ひたすら驚くHの「思いがけず」や不快感を伴うB「不本意である」の意が出て来る。さらに、自然ということは、自らの意志とは関係のないことなので、必然的にC「つまらない」ばかりかG「無関心な」意になってしまう。そして、Iの「軽率である」は、自然に進んで行く言動そのものが、本来確実性や安定性に欠けるものなので、おのずと

生じた意であろう。最後に、JはAの「あてもなくふらふらと」した状態から派生して「そわそわとして落ち着きがない」の意を示すようになったものと思われる。

以上、AからJまで計一〇個に分けた意味は、まとめてみると、右のように半分ほどに縮小して考えられる。しかし、一〇個が持つそれぞれの意味は微妙に違い、またどれも用例がしっかりと出て来る。よって、数は多いが、これらの意味はすべてその存在を認めざるを得ないように思われる。なお、スズロやソゾロがこれだけ多くの意味に派生したのは、多分原義が非常にあいまいだったからであろう。Dの「何となく」「わけもなく」はきわめて都合のいい訳語で、いくらでも他の類似した意に代わり得るように思う。しかし、こういうどこか不明瞭な捉えどころのない言葉は、言語生活を送る上でやはり必要であったに違いない。そこで、たまたまそれに当たったスズロ・ソゾロは大いに重宝がられ、使い続けられたのではないだろうか。結局、スズロとソゾロの差異は意味ではなく、再三述べて来たように、時代にあると言えそうだ。

さて、長期にわたってスズロ・ソゾロについて考察を加えて来たが、かなり意味認定が難しく、わかりにくい語であった。まだまだ考慮すべき点が多く、釈然とはしないが、大方のご叱正を期待して、ひとまずこのあたりで筆を措くことにしたい。

注1　藤原定家の青表紙本を底本とする『源氏物語大成　巻四　索引編』（池田亀鑑、中央公論社、昭和四二年三月発行）では、五例のスゾロニを掲げている。よって、これに従った注釈書や索引の類はスゾロの存在を認めていることになる。

2　『伊勢物語に就きての研究　研究編』（池田亀鑑、有精堂、昭和三八年五月）　三四八ページ

3　旧版の岩波日本古典文学大系本『平家物語　上』の補注　四五〇ページ参照

4　西行の詠んだ『山家集』の歌は「山里のそともの岡の高き木にそぞろがましき秋蝉の声」というもので、その「そぞろがましき」の部分が『夫木和歌抄』では「すずろがましき」となっている。おそらく元の歌は『山家集』の方であろうが、その「そぞろがましき」だけが変わっているのは、当時ソゾロとスズロの意味が接近し揺れていたためであろう。

5　阿波国文庫本については、本誌二十六号の注2参照。伝肖柏筆本は宮内省図書寮の所蔵で書写年代は、室町末期という。　注2の　三五七ページ参照

6　本誌二十九号の注3参照

7　Jはスズロに例がなく、ソゾロにのみあった。ただし、関連語の考察の③で述べたように、スズロカス、スズロガマシ、スズロフなどJの意味が元になった複合語がいくつかあるので、とりあえずスズロにもJの意味があったという前提のもとに論を進めて行くことにする。